

研究所だより



第130号

令和3年3月26日発行

可児市教育委員会

可児市教育研究所

可児市広見一丁目5番地

TEL (0574) 63-4841

E-mail : kyoikukenkkyu@city.kani.lg.jp

それでもやろうと思ったのは、どうしてなの？

可児市小中学校長会長（中部中学校長） 堀部 好彦

中部中では、昨年11月と12月に、学年音楽会（合唱と合奏）を行いました。感染症対策を万全にして実施し、様々な制約がある中でしたがどの学年の生徒もよく頑張りました。この会で、私は生徒たちに次のように問いかけました。

☆感染症対策により練習も本番も昨年度までのようには取り組めず、どの学級も納得のいくまで合唱等を創り上げることが難しいことは初めからわかっていたのに、それでも音楽会をやろうと思ったのは、どうしてなの？
☆そして、不十分な練習では賞を付けることもあまり意味がないと考えた。毎年、賞を目指してどの学級も盛り上がるのだけれど、「賞なし」でも音楽会をがんばろうと思ったのはどうしてなの？

☆さらに、毎年音楽会の会場はアーラのホールなのに、今回はアーラ改修工事のため体育館で行った。それでも、いつもの年のように一生懸命取り組んだのは、どうしてなの？

音楽会后、各学級でこの問いかけについて話し合い、音楽会の値打ちを改めて考えました。生徒たちは、音楽会で仲間と共に自分たちの音楽を創り上げようと努力することは、生徒会で大切にしてきた「あたたかい かかわり」を高めていくことなのだと考えました。そして、「なぜ、それでもやろうと思ったのか」の答えとして、「あたたかい かかわり」の“その先にあるもの”にまで目を向ける、そんな生徒たちがいました。

“その先にあるもの”とは、新たな社会を担うということです。生徒たちは生徒会の合言葉である「あたたかい かかわり」は、中学生の時だけでなくやがて大人になった時にも意味を成すものなのだと気づいたのです。この気づきを大事に育て、社会の役に立つ人間として幸せに生きていくことを願うばかりです。

今年度、コロナ禍により、これまで当たり前存在していた様々な教育活動が当たり前でなくなるという状況に追い込まれた私たちは、一つ一つの活動や指導の値打ちについて見つめ直すことができました。その過程で、これはやらなくてもいいかもしれないと、中止・削除を決めたものがあるでしょう。教育活動のスリム化や働き方改革につながった動きでした。

もう一つは、工夫改善して新たなものを創造し断行したということもあったのではないのでしょうか。そこには、私が音楽会で問いかけたように、各校の教職員の方々が「それでもやろうと思ったのは、どうしてなの？」と自ら活動や指導の値打ちについて深く見つめる時間が存在したに違いありません。

この創造と断行により得られたものは、教育活動のスリム化や働き方改革に勝るものがあると思っています。それは、学校教育に携わる者としての矜持です。コロナにくじけない心意気が、揺るぎない矜持を育んだのです。この誇りを胸に、令和3年度を迎えたいものです。

令和2年度 可児市学校教育力向上事業

ねらい

「誰もが過ごしやすい学びやすい学校、学級をつくり、児童生徒の学力の向上を図る」

3つのキーワード

「ルール」…共通の行動規範、行動様式
 「リレーション」…親和的な関係づくり
 「ユニバーサルデザイン」…誰にでもわかりやすい

検証・調査

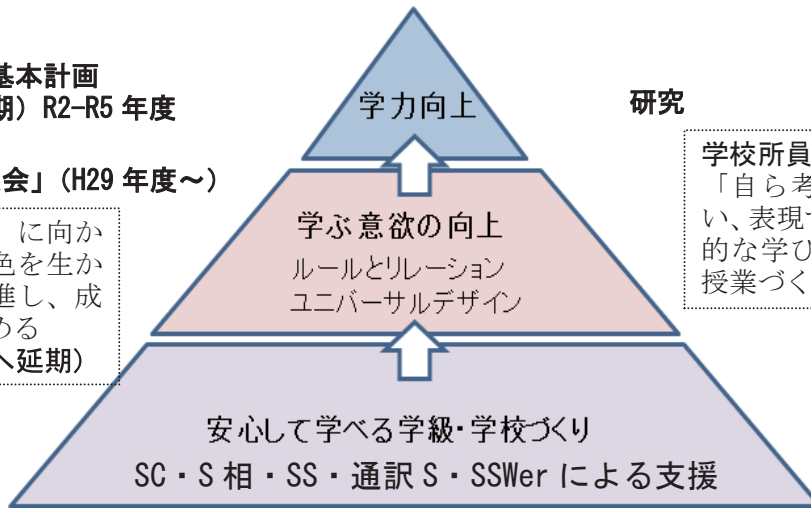
NRT、全国学力調査
 QU 検査

教育大綱

市教育振興基本計画
 (第2期) R2-R5 年度

「笑顔の学校公表会」(H29 年度～)

「笑顔の学校」に向かって自校の特色を生かした取組を推進し、成果を市内に広める
 (令和3年度へ延期)



研究

学校所員会

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の育成～協同的な学びの理念に基づいた授業づくりを通して～」

2グループに分かれ授業研究
 ※今年度は各学校で所員による授業研究に変更

●教育講演会→中止
 講師はスクールロイヤー神内 聡先生の予定でした。(R3 年度以降も中止)

●特別支援教育連続講座(3回)→中止
 可児特別支援学校 地域支援センター
 ●教育研究所主催の夏季研修(11 研修講座)
 →多くを中止

●各小中学校オープン講座
 「特別支援教育」「教科指導」「体験講座」など

●学校所員研修
 「協同的な学びの理念に基づいた授業づくりの実際について」
 倉知 雪春(学びの共同体研究会)

●講師派遣(Q-U・ala など)
 Q-U: 神谷光子 市内小中学校12校
 いのちの授業: 直井亜紀(さら助産院)
 ala 学校おすすめプログラム→中止

◇療法士による発達障がいに関する巡回相談
 全小中学校対象

◇外国語・コミュニケーション教育推進事業(かにっ子英語)
 →サマースクールは中止

◇発達と教育の相談会(5月～3月の毎月1回)
 約20件の相談を3名の医師など専門家が行う

◇スマイリングルーム
 学習・体験活動、創作活動・表現活動
 運動・レクリエーションなど

令和2年度 可児市学校所員会 研究実践報告

令和2年度 学校所員会の研究実践について紹介します。

1 学校所員の研究テーマ

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の育成 ～協同学習の理念に基づいた授業づくりを通して～」

2 研究内容

新学習指導要領での授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現を佐藤学氏の提唱する「学びの共同体」での協同学習の理念に基づいた授業づくりを通して、①コロナ禍における「学び合い」を大切に学習活動の在り方 ②創造的・挑戦的学びを引き出す「共有の課題」と「ジャンプの課題」の工夫について実践しました。

3 実践の状況

(1) 「協同的な学び」についての研修

①6月9日 学校所員会

演題 『協同学習』の進め方

講師 倉知 雪春 先生

(愛知文教大学 学びの共同体スーパーバイザー)

②9月2日 学校所員会

演題 『協同学習』の授業での実際

講師 倉知 雪春 先生

(愛知文教大学 学びの共同体スーパーバイザー)

(2) 各学校での授業実践

学校所員名	教科<単元名>
中島 由貴(今渡南)	算数<よみとるちからをのぼそう>
吉田 賢司(土田)	社会<戦国の世から天下統一へ>
大澤 拓也(帷子)	算数<かけ算>
柏木 菜津子(春里)	国語<じどう車くらべ>
河合 香穂里(旭)	道徳<公平な態度とは～決めつけないで～>
吉村 真美(東明)	国語<にたいみのことば、はんたいのことば>

佐橋 摩衣子(広見)	道徳<正直はだれのため～新次のしょうぎ～>
小澤 奨真(南帷子)	算数<単位量当たりの大きさ>
加藤 翔太(桜ヶ丘)	算数<長さ>
長谷川由奈(今渡北)	国語<秋の夕暮れ>
渡邊 草太(兼山)	社会<はたらく人とわたしたちの暮らし・店ではたらく人>
玉置 敬子(蘇南)	英語<ブラジルから来たサッカーコーチ>
宮越 大貴(中部)	理科<身のまわりの物質>
加藤 佑弥(西可児)	技術<材料と加工に関する技術>
石井 雅大(東可児)	社会<価格の働きと金融>
吉村 一輝(広陵)	社会<中部地方>

4 実践を終えて

今年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大を鑑み、所員が集まったの研究会を行うことができませんでした。そのため、所員が各学校で授業実践を行いました。

「三密を避けることが要請される中、日常的に『協同して探究する学び』をどう作っていくか」が、大きな悩みとなりました。

子どもの学びは、いろいろな考え方の「擦り合わせ」で深くなります。しかし、「密接」を避けるため、子ども同士のかかわりが薄くなり、子ども同士で気づくことが難しいのが現状です。そこで、教師が「聴く」「つなぐ」「もどす」を率先して行い、「かかわり」を生み出してきました。そのことにより、子どもたちは「つながる学び」「聴き合う学び」のよさを実感し始めます。

子どもが、学びに魅力や喜びを感じる時は、自分たちで発見した時です。そんな発見がたくさんある授業づくりを、今後も大切にしていきたいと考えています。

紙面の都合上一部しか紹介できませんでした。熱心な所員の先生方のご協力により、実り多い研究となりました。深く感謝いたします。

初任者の声

「あたたかいかかわりの中で 学んだこと」

可見市立中部中学校 山田 和奏

新型コロナウイルスの影響で学校活動が制限され、例年のように活動できない日々が続いた一年間だった。不安も多く、戸惑いながら過ごした毎日だったが、生徒や先生方とのかかわりの中で多くのことを学ぶことができた。

私は、あたたかい雰囲気の授業づくりを心がけた。制限がある中で、思うように教材の工夫ができないときもあったが、生徒たち自身が笑顔で楽しもうとしている姿がとても嬉しかった。生徒たちが共に学び合うことで学びが深まり、かかわりも深まっていくのだと気づいた。生徒たちとかかわる中で、このような状況下でも、笑顔で前向きに取り組む姿勢が私自身の大きな励みとなり、笑顔の大切さを改めて学んだ。

先生方とのかかわりでは、こまめに情報共有を行うことを心がけた。中部中学校という大きな学校では、教員同士の連携が特に大切になる。生徒のことを第一に考え、その時にできる最大限のことを行う。先生方の迅速な対応を理解すること、ついていくことに必死だったが、初任者の私にもたくさん声をかけていただき、助けていただいた。また、多くの先生方の授業や指導方法から学ぶ中で、生徒一人一人に応じた寄り添い方が大切だと学んだ。生徒同士の交流が少ないからこそ、マイナスの感情に寄り添い、良い姿や頑張ろうとしている姿を見逃すことなく、認めていくことが大切だと学んだ。

この1年間で多くのことを教えてくださった先生方や生徒たちに感謝の気持ちでいっぱいである。来年度以降も何が起こるか予測できず、臨機応変に対処できる力が重要になると思う。生徒が将来に希望を持ち、仲間とともに笑顔あふれる学校生活を送る中で、私自身も成長していけるよう、これからも努めていきたい。

「コロナ禍における かかわり方の変化」

可見市立中部中学校 二宮 柚葉

新型コロナウイルスの影響により、4・5月は休校、生徒間のかかわりも従来通りとはいかなかった。そんな異例の事態の中、教員生活のスタートを切ることとなった。

仲間に分からないところを聴き合う活動や、体育大会、全校音楽会など、様々な行事を通してのかかわりが制限されている。そんな我慢の多い時期だからこそ、私たち教員や生徒も、仲間とのかかわりの重要性を改めて感じることができた1年になったのではないかと思う。

また、苦しい状況だからこそ、授業での導入において、生徒を引き付ける問いかけをすることや、教師が生徒の困り感や分からなさに寄り添うことの大切さも感じることができた。単元全体の見通しを持ち、本時の授業において、押さえておかなければいけないポイント、生徒が1番困るところはどこかを考え、授業終わりに生徒の「分かった！」という笑顔を生み出せる授業づくりを目指して、今後も教材研究と生徒の実態把握に勤しんでいきたい。

そして、1日でも早くコロナが収束し、生徒たちのかかわりが制限されることなく、様々な場面で仲間とかかわることの楽しさを味わい、生徒の笑顔がより溢れる学校になることを願っている。

コロナ禍で大変な時期にも関わらず、4月、何も分からなかった私がここまでやってこれたのは、先生方のお力添えのおかげである。支えてくださった方々に感謝の意を忘れず、これまで教わってきたことを生徒に還元していきたい。コロナ禍で、かかわり方は変化したが、仲間を思いやる生徒の心は様々なところで感じることができた。今後も無言のかかわりは続くが、こんな時期だからこそ、来年も生徒一人一人の心に寄り添い、良さに目を向けることで、自己肯定感や自己有用感を高めることができる教員でありたいと思っている。

初任者の声

「助け合い、チャレンジできる 学級を目指して」

可児市立広見小学校 森 耀生

初任者としての一年間を振り返ると、授業や学級経営、児童との関わり等がうまくいかず悩んだこと、一方で何事にも一生懸命な子どもの姿に励まされたことなど、さまざまなできごとが浮かんでいきます。

私は、「仲良く助け合い、何にでも積極的にチャレンジできる学級」にするために2つのことを心掛けました。

1つ目は、学級経営での「よいこと見つけ」です。見つけた仲間のよいところを学級で認め合うことで自己有用感を高め、助け合って生活することで仲間関係を深めることにこだわってきました。前期は、「よいこと見つけポスト」を一人一人に作成させ、自分のよさ、仲間のよさが目に見えるようにしました。後期は、私自身もよいこと見つけに参加することにしました。子どもが気づかない視点でのよさを見つけるようにし、その都度紙に記録し、伝えました。すると、子ども達自身が仲間のよさを見つける視点が広がり、自分も人のために頑張ろう、やってみようとする子どもの姿が見られるようになってきました。

2つ目は、教科指導です。はじめは教える気持ちが強すぎたり、明確な狙いが持てなかったりしたため、曖昧な指示、発問になってしまうことがありました。その後先生方のご指導を受けて、「子どもに目的をもたせた活動をさせること」「一時間で目指す姿とそのプロセスを考えること」を大切に授業を行いました。以前より子どもが苦手な学習にも進んでチャレンジできる姿が増えました。

来年度は、一層仲間も自分も大切にでき、何にでも積極的にチャレンジできる学級を創っていきます。また、私自身もチャレンジ精神を忘れず、子どもと共に成長していきます。

一年間を振り返って

可児市立広見小学校 長屋 加奈子

コロナ禍の中での初任者としての一年間。何とかやってこれたのは、学年の先生や初任者指導の先生をはじめとする諸先生方が支えてくださったおかげだと感謝の気持ちでいっぱいです。

子どもたちが楽しく学び合える、そして、仲間同士認め合える学級にしたいと特に2つのことを心掛けました。

1つ目は、自分の気持ちを伝えること、仲間の気持ちに伝えることを大切にすることです。一人一人が仲間の声に耳を傾けることに努め、どんな時も、しっかり話を聞くようにしました。後期はさらに、学級をよくするために、仲間呼び掛けることを大切にしました。特に、後期の柱として学級全体で取り組んだのが、チャイム前着席です。始業の前に授業の準備をすることで、みんなで授業を頑張るという意識をもつことができるようになりました。そして、授業に集中できるように、「机」「姿勢」「心」を整えて授業に臨もうと学級全体で取り組める成果につながりました。

2つ目は、子どもが自分で課題を解決することです。どこを自力で考えさせるか、どこまで学級で確認するかを常に意識していましたが、教え込みになってしまうこともありましたが、今後の課題として、子どもの実態に合った発問を心掛けていきます。

反省の多い一年でしたが、その分学んだことも多かったと思います。思うようにいかないのは子どものせいではない。原因は自分の方にあるのだと、自分を見つめ、学び続けながら、来年度は、より一層子どもたちが楽しく生活できる学級、お互いを認め合える学級を作っていきたいと思います。

第36回教育実践研究助成事業教育実践論文候補者の概要

特別な教育的支援を必要とする児童への個に応じた指導・支援の在り方 ～「わかった・できた」が実感できる授業づくりを目指して～

可見市立帷子小学校 教諭 三井 沙梨亜

本論文は、個の実態に応じた指導・支援や手立てを考え、児童が「わかった・できた」を実感し、学習意欲を向上させることを目指し、実践した記録である。児童の様々な特性による学習活動への影響や、感情コントロールの難しさといった課題から、肯定的な自己理解を基に学習意欲の向上を図った。児童には、自分に合った学び方を身に付け、学ぶ楽しさを感じてほしいと願う。そこで、児童の実態を基に、算数の授業づくりにおいて大切にしたい観点を定め、実態に応じた自作教具の活用や、生活とつなげた学習場面の設定、安定した気持ちで学習に取り組める環境調整の手立てを考え実践した。実践を進めた結果、A児は、自分に合った学習方法が身に付き、3年生のわり算を習得することができた。また、教科と生活とのつながりを主体的に学習し、学習意欲の向上が見られた。本研究では、教科学習と日常生活とのつながりを意識することの大切さが実感でき、生活上の目標を達成し、自立や社会参加のために必要な力をつけることの重要性を改めて感じることもできた。

【講評】

どうすればA児が興味関心をもって学習に取り組むことができるかを考え、工夫された教具は間違いなくA児の知的好奇心をくすぐる物であったと思います。教具を工夫されるだけではなく、それを有効的に使った学習活動がなされたことで、A児の理解が深まったのではないのでしょうか。さらに1時間の授業で獲得した力を定着させるために、日常生活と結びつけた試みをされたことがA児の「わかった・できた」という自信につながったと思います。

道徳的価値についての理解を深め、日常生活へつなげる道徳をめざして ～「決めつけない」人間関係を通して～

可見市立旭小学校 教諭 河合 香穂里

本論文は、あたたかい人間関係のもと自分の考えを話す習慣を身に付けた上で、「決めつけない」という道徳的価値について話し合い、自己の生き方や日常生活へとつなげる場を設定することにより、児童の道徳的な実践意欲の向上と態度の変容を目的とした実践についてまとめたものである。研究実践（1）では、仲間のよいこと見つけ指導や継続的なSSTを行うことで、日常的に他者と対話をする習慣と安心・安全な学級集団の形成を行った。研究実践（2）では、他の教育活動との関連を考えて発問の精選を行い、児童の様相に応じた深めの発問を用意することにより、児童の道徳的価値の理解の深化を図った。研究実践（3）では、授業の展開後段で道徳的価値に沿って自己の生き方を振り返る活動と手立てを工夫し、道徳の授業事後の活動をつなげていくことで、道徳の授業を日常生活へとつなげた。

これらの実践により、児童の道徳的な実践意欲と態度の変容を促すことができた。今後は、他の価値項目でも実践を行い、児童の日常生活により生きる道徳の授業を行っていきたい。

【講評】

「安心して自分の意見が言えるようになってほしい」「決めつけた見た方をせず、公正・公平に受け入れられてもらえる集団であってほしい」という先生の明確な願いを基に研究が進められ、児童の日常生活へつなげる道徳実践となっています。「よいこと見つけ」や「SST」などの方策も有効だと感じました。今後も、先生の願いを大切にしつつ、いろいろな道徳的価値について継続的・累積的に実践を進めていけることを期待します。

「学校はチーム！」チームで行うことで効果を上げる特別活動指導の在り方 ～目的と手段を明確にし、共通の足場を大切にしている指導を通して～

可児市立西可児中学校 教諭 古野 寿

学習指導要領解説には、「特別活動は、児童生徒が学校生活を送る上での基盤」とある。しかし、同時に「内容や指導のプロセスの構造的な整理が必ずしもなされておらず、各活動等の関係性や意義、役割の整理が十分でないまま実践が行われてきたという実態も見られる。」という課題も挙げられている。教員の年齢構成が変化し、若い教員が増えている現在、「内容や指導のプロセスの構造的な整理」を行い、限られた時間の中でも学校が1つのチームとして、見通しをもって、効果的に特別活動指導にあたるように、チームメイトとして支援することは経験を積んだ教師の役割である。そこで、「共通の足場を作り、目的と手段が明確になるための指導部長会の運営と職員会の在り方の工夫」や「行事を通して生徒にどう迫り、生徒の自己有用感をいかにして教員全員で育てるのか」を模索した。その結果、チームメイトである全教員の情熱とやる気が1つにつながり、共通の目的と足場を大切にしている効果的な指導ができるようになった。その指導は、生徒に自己有用感を育てる変容を促した。

【講評】

教育現場の今日的な課題（教職員の年齢構成の変化、働き方改革）が叫ばれる中、学校生活の基盤となる特別活動を通して、中堅職員の少ない中「チーム西可児」で若い教員と共に西可児中生徒を育てていきたい熱い思いが伝わる論文だと思いました。若い先生の「経験のなかった私に、見る視点と選択肢を与えてもらったことが大きかった。その選択肢の中から自分で選んで実践できた。失敗もしたけど失敗の質が違った。」という言葉からも先生方の充実感と成長を感じます。今後も実践を継続され、若い先生方が次は古野先生の立場で活躍することを楽しみにしたいです。

「読むこと」を通して自分の考えを表現する生徒の育成 ～ Post(ポスト)-reading(リーディング)の言語活動を重視して～

可児市立西可児中学校 教諭 高木 恵子

本研究の目的は「読むこと」を通して自分の考えを表現する生徒の育成である。本研究では、読み取れた内容をもとに自分の考えを表現する段階の言語活動をPost-readingとして定義し、1つの単元で2段階のPost-readingを位置付けた。1回目のPost-readingから自己表現への「見通し」をもち、さらに「振り返る」場を設定し、そこでの省察を踏まえることで2回目のPost-readingを充実させられると考えたからである。

研究内容Ⅰでは、自己表現の見通しをもつパフォーマンスを提示することにより、自己表現を促す読みの指導改善を図った。実践内で見られた抽出生徒のつまずきの要因は、概要や要点を解釈して読む力が不十分であったため、訳読や音読等、従来の内容理解中心の機械的な読みの指導改善を図った。研究内容Ⅱでは、認知的な負担が要因でつまずく抽出生徒への手立てとして、教科書本文から英文を引用して自己表現を促す読みの指導改善を図った。

上記2点の実践に対して、全3回の生徒アンケート調査とPost-readingにおける生徒の記述内容の変容及び変容した生徒数の増減により、その効果を検証した。

【講評】

複数年に渡る研究実践から、研究課題を精選し、且つ新学習指導要領の改訂の重点を的確に捉え、全国学力学習状況調査の結果、生徒への複数にわたるアンケート結果等から、検証されていたことがよくわかる論文となっています。本実践で学習の基礎である「読む」活動の充実が「表現」することの充実につながることを示されました。このことは他教科の学習にも通じる内容であったと思います。

令和2年度可見市教育実践論文応募のまとめ

◇応募状況

校種	職務別			年代別				性別			領域別 (論文数)																																		
	教頭	教諭	養護教諭	合計	20代	30代	40代以上	合計	男性	女性	合計	教科										小計①	道徳	特別活動	総合学習	外国語活動	学級経営	生徒指導	特別支援	健康安全	その他	小計②	合計												
												国語	社会	算数学	理科	生活	音楽	図工	美術	技術	保健													英語											
小	1	12		13	10	2	1	13	4	9	13	2	1	2		1															6	2					2						1	7	13
中		10		10	7	1	2	10	6	4	10	1		2	2						1										7		1									1	3	10	
計		22	0	23	17	3	3	23	10	13	23	3	1	4	2	1	0	0	1	0	1	13	2	1	0	0	3	0	2	0	2	13	2	1	0	0	3	0	2	0	2	10	23		

＜優秀賞＞ 学番順

No.	学校名	氏名	領域	研究テーマ
1	帷子小	三井 沙梨亜	特別支援	特別な教育的支援を必要とする児童への個に応じた指導・支援の在り方～「わかった・できた」が実感できる授業づくりを目指して～
2	旭小	河合 香穂里	道徳	道徳的価値についての理解を深め、日常生活へつながる道徳をめざして～「決めつけない」人間関係を通して～
3	広見小	林 美穂	道徳	よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う道徳科授業の在り方～自分事としてとらえ、考え議論する道徳の授業づくり～
4	西可児中	高木 恵子	英語科	「読むこと」を通して自分の考えを表現する生徒の育成～Post-readingの言語活動を重視して～
5	西可児中	古野 寿	特別活動	「学校はチーム！」チームで行うことで効果を上げる特別活動指導の在り方～目的と手段を明確にし、共通の足場を大切にしている指導を通して～

＜優良賞＞ 学番順

No.	学校名	氏名	領域	研究テーマ
1	今渡南小	篠原 妃伽	国語科	「書くこと」に対し意欲的に活動できる子の育成を目指して～文章の中心やつながりを大切に「書くこと」の実践を通して～
2	東明小	水野 奈月	特別支援	通級学級と通常学級のつながりある支援・指導
3	広見小	奥村 尚浩	管理経営	コロナ禍において児童の学校適応を促す学校運営～児童へのアセスメントの活用と職員指導力向上を目指すマネジメントを通して～
4	今渡北小	三輪 恵汰	生活科	活動を精選した「町たんけん」の在り方
5	今渡北小	松尾 雄太郎	学級経営	コロナ禍における家庭学習の充実を目指して～宿題の在り方の模索を通して～
6	今渡北小	加藤 沙紀	社会科	新たな問いをもち、意欲的に課題を追究していく授業づくり～生活科の学びを生かして～
7	中部中	竹田 浩大	研究推進	学び合う楽しさを味わう生徒の育成～「聴き合う関係」「真正の学び」「ジャンプの課題」のある授業改善と職員集団の挑戦～

◇令和2年度実践論文 審査講評より

- どの論文も、教育の今日的課題を踏まえたものとなっている。特に、それぞれの論文の副題に先生方の主張がよく表れている。実践を進める視点が焦点化されていると感じた。
- 実践の成果をエピソード（抽出生徒の変容）とエビデンス（アンケート調査の結果分析等）の両面から考察することで、説得力が生まれる。
- 教員経験3年目までの3人の先生方においては、実践の意欲、子どもたちへの温かい眼差しが溢れる論文であり、今後の成長が本当に楽しみである。初任の先生方をしっかりと育てていってほしい学校経営に敬意を表したいと思う。
- 児童の実態をていねいに把握し、発達段階に応じたきめ細かな指導・支援を行っているところが印象的であった。また、QU 検査を実態把握に活用している実践も多くみられ、アセスメントを生かした取り組みにつながっている。
- コロナ禍における学習活動の工夫がみられる実践があった。どのような状況でも子どもたちの力を伸ばすための地道な努力を評価したい。
- 新学習指導要領の改善点を意識した実践が多くあった。道徳についても新しい視点での実践があり、今後実践を積み重ねていきたい。
- 論文としては、教育実践の記録とともに、実践の有効性を示す客観的な検証が必要である。児童生徒の姿の変容だけでなく、調査などによる客観性を大切にしたい。
- 教師としての力量を高め、自分の実践を客観的に振り返る意味でも、論文としてまとめるなど、日々の地道な取り組みを大切にしていきたい。

※研究所だよりは次号より「教育研究所ホームページ」に掲載いたします。